

『宗鏡録』所引「観和尚十種道場観」について 新羅華嚴文献との関連

著者	佐藤 厚
著者別名	SATO Atsushi
雑誌名	東洋学研究
巻	59
ページ	223(228) - 232(219)
発行年	2022
URL	http://doi.org/10.34428/00013747

『宗鏡録』所引「観和尚十種道場観」について

—新羅華嚴文献との関連—

佐藤 厚

1 問題の所在—新羅仏教文献の搜索と『宗鏡録』

新羅時代は朝鮮半島で仏教が盛んだった時代である。元暁(617 - 686)や義相(625-702)など、中国仏教に影響を与えた僧侶も多い。ただ、新羅仏教研究の大きな問題は、残存する文献が少ないことである。朝鮮半島の僧侶だけの著作を収録した『韓国仏教全書』の中、新羅仏教文献¹は、18名分59種である。これは本来存在したであろう書物、例えば『韓国仏書解題辞典』(東国大学校仏教文化研究所、1982年)の中の新羅の人物と典籍の数、42名分368種に比べると24名分309種少ない。そうした中、近年、新羅仏教文献の発見、研究が進められている²。筆者が新羅仏教文献を搜索する動機は、新羅の仏教

1 新羅篇の巻1から巻3、および補遺篇である巻11の一部に収録される。

2 新羅仏教文献の発見、研究はA.新発見の文献によるものと、B.既存の文献調査によるものに分かれる。A.新発見の文献によるものは次の8件が報告されている。

①元暁『判比量論』断簡。これは朝鮮半島には残っておらず、日本にだけ断簡という形で存在し、美術館や個人の所蔵となっている。近年、断簡の発見が相次いでいる。最新の研究は東国大学校仏教文化研究院HK研究団『元暁『判比量論』の新訳注』(東国大学校出版文化院、2021年)である。

②円測『無量義経疏』(滋賀県西教寺蔵)の研究。これは天台宗僧侶の憐昭の書であるが、内容は新羅出身の法相宗学者・円測の『無量義経』への注釈である。1964年、平丁照は内容を検討し、それが円測の書である可能性を論じた。その後、2010年、円測研究者・橋川智昭は「憐昭『無量義経疏』と円測『無量義経疏』」(『印度学仏教学研究』通号120、2010年)の中で平論文を進め、円測の書であることをほぼ確定した。

③師茂樹は日本の『古筆手鑑大成』の中から円測『成唯識論疏』断簡を発見して発表した。「伝弘法大師・草書写本断簡群について：円測『成唯識論疏』断簡を中心に」(『동아시아에 유전된 한국불교 문헌과 사상』[東アジアに流传した韓国仏教文献と思想]国際会議プロシーディングス、2019年5月)

④南宏之は『日本古写経善本叢刊 書陵部蔵玄一撰無量寿経記 身延文庫義寂撰蔵無量寿経述記』(国際仏教学大学院大学日本古写経研究所文科省戦略プロジェクト実行委員会、2013年)の中で、玄一『無量寿経記』と義寂『無量寿経述記』の研究を行った。玄一『無量寿経記』上巻(己統蔵)の異本である宮内庁書陵部所蔵本、および身延文庫所蔵の義寂『無量寿経述記』巻一の断簡の報告である。ちなみに『韓国仏教全書』は諸書の引用の復元である。

⑤円弘『妙法蓮華経子注』の研究。金天鶴「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について」(『印度学仏教学研究』126、2012年)以後、金天鶴を含む金炳坤、岡本一平らにより研究が続けられている。金炳坤「円弘は新羅僧侶か」(『身延山大学仏教学部紀要』20、2019)、金炳坤「円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観」(『身延論叢』25、2020年)、岡本一平「円弘撰『円弘師章』の逸文研究」(『身延論叢』25、2020年)、金天鶴「『法華経論子注』写本の流通と思想」(『身延論叢』通号25、2020年)

⑥佐藤厚は「『健拏標訶一乗修行者秘密義記』の基礎的考察」(『東洋学研究』通号39、2002年)において、房山石経(中国北京郊外)に収録される「一乗修行者秘密義記」を研究。これは平壤出身の法蔵の著である。その途上で、本書が違う題名で中国の延寿(10世紀)『宗鏡録』にも引用されていることを発見した。

⑦佐藤厚は「韓国普光寺所蔵『仁王般若波羅蜜経』について」(『印度学仏教学研究』通号153、2021年)の中で、韓国の仏教博物館所蔵の写本の内容が、太賢『仁王経古述記』の可能性あることを指摘した。

⑧佐藤厚は「澄観撰『十二因縁観』の著者問題」(『南都仏教』通号86、2005年)の中で、華嚴宗第四祖・澄観の作とされてきた『十二因縁観』について、内容を検討したところ、それが新羅の華嚴文献である可

研究というものが、どのようなものであり、その中に中国や日本と異なる特徴があるかどうかを調べるためのものである。これに対して、仏教思想は普遍性を志向するものであり、国別の特徴を求めるのはおかしいという見解もあるかもしれない。しかし筆者は、仏教思想が国ごとに受容された時、普遍性ととも特殊性を持つようになると思う。

さて、筆者は2002年に、10世紀に呉越国で活動した法眼宗の延寿(904-976)の『宗鏡録』の中に新羅文献である『一乗修行者秘密義記』が引用されていることを発見した³。『宗鏡録』が制作された当時、呉越国と高麗は仏教交流をしており、その中で新羅高麗文献が収録されたものと考えられる。本稿もこの観点からの研究である。

『宗鏡録』巻27に「観和尚云く」として、十種の如来が十種の道場に坐して十種の法門を説く教説⁴が引用される。内容は華嚴思想の教説である。そして通常、華嚴で「観和尚」といえば華嚴宗第四祖とされる澄観(738-839)が予想されるが、これは現存の澄観の著作には見当たらない。そして内容をさらに検討すると新羅華嚴との関係がみられる。よってこの教説は中国の澄観ではなく新羅華嚴のものではないか、と予想されるのである。そこで関連文献をあわせて調査を試みた。

結論において筆者は二つの可能性を指摘したい。一つは、「観和尚」は澄観であり、従来知られていない著作からの引用であり、その中に新羅華嚴の影響が見て取れる、というもの。もう一つは、「観和尚」とは澄観とは別の人物であり、新羅の華嚴を学んだ人物の可能性である。

2 『宗鏡録』巻27所引「観和尚十種道場観」

『宗鏡録』巻27では冒頭で「道場」がテーマとなり、それに関する経論が引用される。その中で、「観和尚は一心門に於て十浄土を立つ。十種如来が十種道場に坐して十種法門を説くことを成ず。」⁵と述べる。ここでは一心を十種の浄土にわけ、それぞれの浄土(=道場)において特定の如来がおのおの法を説くとする。それは次のようである。(1)金剛如来は金剛道場において金剛法門を、(2)解脱如来は無著道場において無著法門を、(3)は無住

能性を論じた。

B. 引用文献調査では、①福士慈稔『新羅元暁研究』(2004年、大東出版社)は、日本・中国の仏教文献に引用される元暁の文献を調査したものである。

②福士慈稔『日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究』は、日本の仏教文献に引用される韓半島の仏教文献を調査し、その引用態度を検討したものである。

③岡本一平が、「新羅唯識派の芬皇寺玄隆『玄隆師章』の逸文研究」(『韓国仏教学 seminar』8、2001年)の中で、日本の凝然の『五教章通路記』などに引用される新羅の僧侶・玄隆の文献を収集し、内容の解析を行った。

④チェ・ヨンシクが、「珍嵩の『孔目章記』逸文に対する研究」(『韓国仏教学 seminar』9、2003年)において日本の文献に引用される新羅の珍嵩の『孔目章記』を収集し、内容の解析を行った。

3 佐藤厚「『健拏標訶一乗修行者秘密義記』の基礎的考察」(『東洋学研究』39、2002年)

4 この教説は日本の愚中周及(1323-1409)が編んだ『宗鏡録』の撮要本『稟明抄』にも引用される。柳幹康「愚中周及『稟明抄』と『宗鏡録』」(『花園大学国際禅学研究所論叢』13号、2018年)

5 延寿『宗鏡録』巻27(大正蔵48・568c)

道場において無住法門を、(4)摩訶衍如来は無礙道場において無礙法門を、(5)菩提如来は無相道場において無相法門を、(6)實際如来は無際道場において實際法門を、(7)真如如来は常住道場において常住法門を、(8)法界如来は法界道場において法界法門を、(9)法性如来は法性道場において法性法門を、(10)涅槃如来は寂滅道場において寂滅法門を説くという。つまりこれは一心という真理を十の側面から分析したものである。これを表に整理すると<表1>のようになる。

<表1>

如来名	道場名	法門名	経証
①金剛如来	金剛道場	金剛法門	『80 卷華嚴経』、『維摩経』
②解脱如来	無著道場	無著法門	『大乘起信論』
③般若如来	無住道場	無住法門	『華嚴経』?、『維摩経』
④摩訶衍如来	無礙道場	無礙法門	なし
⑤菩提如来	無相道場	無相法門	『維摩経』
⑥實際如来	無際道場	實際法門	『仏説魔逆経』
⑦真如如来	常住道場	常住法門	『一乘法界図』?
⑧法界如来	法界道場	法界法門	『80 卷華嚴経』
⑨法性如来	法性道場	法性法門	なし
⑩涅槃如来	寂滅道場	寂滅法門	『維摩経』?

それぞれの教説に出る経証としては、『80 卷華嚴経』、『維摩経』、『起信論』、『仏説魔逆経』である。これらは、ほぼ華嚴学派の典籍である。では十の如来の教説を一つずつ見ていく。

①金剛如来

一に、金剛如来は金剛道場に在りて能く金剛法門を説く。自心の智を以て我が心性を見れば、此の心に、本従り来た、永く諸相無し。猶し虚空の如く湛然不動なり。明らかに之の心を見るを金剛如来と名く。所説の金剛法門とは、経（『80 華嚴経』）の偈に云うが如し、「菩薩の智慧の心は、清浄なること虚空の如し。無性無依の処にして一切不可得なり」⁶と。云う所の十浄土とは、『経』（『維摩経』）に云うが如し、「十方国土、皆虚空の如し」⁷と。⁸

6 実又難陀訳『80 華嚴経』第 59「離世間品」第三十八之七「菩薩智慧心、清浄如虚空、無性無依処、一切不可得。」（大正 10・315a）

7 鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』卷下、香積仏品第 10「所以者何。十方国土皆如虚空。又諸仏為欲化諸樂小法者。不尽現其清浄土耳。」（大正 14・552a）

8 延寿『宗鏡録』卷 27「一金剛如来。在於金剛道場。能説金剛法門。以自心智、見我心性。此心従本来、永無諸相。猶如虚空湛然不動。明見之心。名金剛如来。所説金剛法門者。如経偈云。「菩薩智慧心。清浄如虚空。無性無依処。一切不可得」。所云十浄土者。如経云「十方国土皆如虚空」。（大正蔵 48・568c）

②解脱如来

二に解脱如来は無著道場に在りて能く無著法門を説く。有為無為の一切の諸法相は皆な心従り出れば、心ならざること無きなり。能く自心より出れば、尚を体相無し。云何が心に依りて出る所の諸法に実体有りや。即ち体と相とは一味にして別無ければ何の著する所、有りや。是を解脱如来と名く。所説の無著法門とは、『論』（『大乘起信論』）に云うが如し、「一切法は皆な心従り起るを以て、一切の分別は皆な自心を分別す。心は心を見ず。無相なることを得べし。」⁹と¹⁰。

③般若如来

三に般若如来は無住道場に在りて能く無住法門を説く。『經』（『華嚴經』？）に云く、「三世間に入る」¹¹と。自身の所住处、随求の処、永く無自性なるが故に住相を得ず。是の故に当に知るべし。一切諸相は、一の無住の法にして、随縁の時、相即相融して、「無住の本従り一切法を立つ」（『維摩經』）¹²。能く無住の心を解するを般若如来と名く。恒に無住法門を説く¹³。

④摩訶衍如来

四に摩訶衍如来は無礙道場で無礙法門を説く。譬えば虚空は不動なるも諸色を出生するが如し。諸色を出すと雖も虚空の外ならず。唯だ空所作の色なれば、色空は無礙にして融じて二相無し。修心も亦た然り。理事無礙なり。理とは心なり。事とは身なり。本従り已來た、色心は無二なり。是の如く身心の無礙なるを、名けて摩訶衍如来と為す。無礙法門を説く¹⁴。

⑤菩提如来

五に菩提如来は無相道場に在りて能く無相法門を説く。經（『維摩經』）に云く、「四

9 馬鳴造、真諦訳『大乘起信論』「則無六塵境界。此義云何。以一切法皆從心起妄念、而生。一切分別、即分別自心。心不見心、無相可得。」（大正藏 32・577b）

10 延寿『宗鏡錄』卷 27「二解脱如来、在於無著道場、能說無著法門。有為無為、一切諸法相、皆從心出、無不心也。能出自心、尚無体相。云何依心。所出諸法、有実体也。即体与相、一味無別、有何所著。是名解脱如来。所說無著法門、如論云。以一切法皆從心起。一切分別皆分別自心。心不見心。無相可得。」（大正藏 48・568c）

11 仏陀跋陀羅訳『60 卷華嚴經』卷 37、離世間品第三十三之二「仏子。菩薩摩訶薩。有十種入三世間。何等為十。所謂入世間。入語言道。入性。入施設。入想。入名字。入語言。入無尽。入離欲。入寂滅。仏子。是為菩薩摩訶薩十種入三世間。因此十種入三世間。則能普入一切三世間。」（大正藏 9・634b）

12 鳩摩羅什訳『維摩詰所說經』卷中、觀衆生品第七「文殊師利。從無住本立一切法」（大正藏 14・547c）

13 延寿『宗鏡錄』卷 27「三般若如来、在於無住道場、能說無住法門。經云。入三世間中、自身所住处、随求之処、永無自性、故不得住相。是故当知。一切諸相、一無住之法、随縁之時、相即相融、從無住本、立一切法。能解無住之心、名般若如来、恒說無住法門。」（大正藏 48・568c）

14 延寿『宗鏡錄』卷 27「四摩訶衍如来、於無礙道場、說無礙法門。譬如虚空不動、出生諸色。雖出諸色、不虛空外。唯空所作色。色空無礙、融無二相。修心亦然。理事無礙。理者心也。事者身也。從本已來、色心無二。如是身心無礙、名為摩訶衍如来、說無礙法門。」（大正藏 48・568c）

大は無主にして身も亦た無我なり」と¹⁵。此の能所の相を離るを、名けて仏身と為す。是の如く観心絶えざれば、観心の行ずる処に円かに実相を備うるを菩提如来と名く。一切衆生は即ち菩提の相なるが故に¹⁶。

⑥ 實際如来

六に實際如来は無際道場に在りて能く實際法門を説く。所謂る自眼を以て小物を見る時、其の物、眼内に相入す。其物、微に至らば内無きを以ての故に、則ち無外の法界大相を含む。此を以て知る、一刹那の心に、物の相を見る時、即ち後念の心中に物の相、有ること無し。前心と後念と皆な自心なるが故に。明らかに知る、塵量を動かさずして遍く法界に至る。則ち自心の實際、一切処に遍し。經（『仏説魔逆經』）に云く、「業を興す所に、所作有らば、即ち魔事と為す」¹⁷と。「六根は所進無く、諸法を行ぜざるを平等精進と名く」と¹⁸。¹⁹

⑦ 真如如来

真如如来は常住道場に在りて能く常住法門を説く。心を観じて周遊するも、塵利中に於いて湛然凝寂なり。此の凝寂の心、称して縁に至るも本体を失せず。是を以ての故に、未来際を尽して縁に値うも、恒に不動なり。故に常住法と名くるなり。經（義湘『一乘法界図』？）に云うが如し。「有為無為の一切諸法、有仏無仏、性相常住にして変異有ること無し」²⁰と²¹。

⑧ 法界如来

八には法界如来、法界道場に在りて能く法界法門を説く。法とは実相心、界とは此の心に依りて出る所の諸利なり。譬えば、大海の所生の諸物は皆な海ならざること無き

15 鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』卷中、文殊師利問疾品第五「四大合故、假名為身。四大無主、身亦無我。又此病起皆由著我。」（大正蔵 14・544c）

16 延寿『宗鏡録』卷 27「五菩提如来、在於無相道場、能説無相法門。經云。四大無主、身亦無我。此離能所之相、名為佛身。如是觀心不絶者、觀心行處、円備実相、名菩提如来。一切衆生、即菩提相故。」（大正蔵 48・569a）

17 竺法護訳『仏説魔逆經』「於是大光白文殊師利。所可謂言。諸菩薩衆有魔事者。何謂魔事。文殊答曰。有所興業而有所作。則為魔事。」（大正蔵 15・112b）

18 竺法護訳『仏説魔逆經』「假使仁者。眼無所進不行於色。是則名曰平等精進。耳無所進不行音聲。鼻無所進不行衆香。舌無所進不行衆味。身無所進不行細滑。意無所進不行諸法。是則名曰平等精進。」（大正蔵 15・112b）の取意。

19 延寿『宗鏡録』卷 27「六實際如来、在於無際道場、能説實際法門。所謂以自眼、見小物時、其物、相入於眼内。其物至微、以無内故。則含無外法界大相。以此知、一刹那心、見物相時、即後念心中、無有物相。前心後念、皆自心故。明知、不動塵量、遍至法界。則自心實際、遍一切處。經云。「有所興業而有所作。即為魔事」。六根無所進、不行諸法、名平等精進。」（大正蔵 48・569a）

20 この部分と同じ引用は、義相『一乘法界図』に見られる。詳細は後述する。

21 延寿『宗鏡録』卷 27「七真如如来、在於常住道場、能説常住法門。觀心周遊、於塵利中、湛然凝寂。此凝寂心、称至於縁、不失本体。以是故尽未来際値縁、恒不動。故名常住法也。如經云、「有為無為、一切諸法、有仏無仏、性相常住、無有變異」。（大正蔵 48・569a）

が如く、一切諸法は皆な実相心従り生ずる所なれば、皆な心ならざる無し。是の故に当に知るべし、眼中に見る所の色、耳の中に聞く所の聲は皆な真法なり。一切法は唯だ一法なるを以ての故に。經（『華嚴經』）に云うが如し、「一切法は唯だ一相なるが故に」²²と²³。

⑨法性如来

九に法性如来、法性道場に在りて法性法門を説く。凡聖、善悪の法を分たざるを名けて性と為す。是の不分の法、法界同中に重重無尽なり。一の中に無量を解して法性は無尽なるが故に。皆な無尽なりと知ることを得る所以は、法界の中、一一の縁に入りて覓むる時、未来際を尽しても無所得なるが故に²⁴。

⑩涅槃如来

十に涅槃如来は寂滅道場に在りて能く寂滅法門を説く。一切法は皆な是れ涅槃なり。能く此の意を得る人は、動作の処に於て寂滅法を見る。生死を離れずして常に涅槃を得、無常の身を捨てずして恒に常身を得。『經』（『維摩經』）に云く。「衆生は如。一切法は如。如に生有ること無く。如に滅有ること無し。」²⁵。此の義を以ての故に、足を挙げ足を下るなかにも、道場を離れず。念念の中に於て常に仏事を作す。故に知る、一念法に通達すれば法は周円し、一心門に諦了すれば門は具足し、則ち無辺仏事、一塵を出ず²⁶。

3 「観和尚」の用例

前述したように『宗鏡録』では、この十種如来の教説は「観和尚」のものとして引用されている。筆者はこれが新羅と関連あると考えているのであるが、その前に、『宗鏡録』の中で「観和尚」として引用される個所が誰を指すのかを検討する。

『宗鏡録』の中で「観和尚」として引用される個所は7か所である。うち現在のところ

22 実叉難陀訳『80華嚴經』巻71「入法界品」第三十九之十二「以能了知法界相故。知一切法唯一相故。」（大正蔵10・385b）

23 延寿『宗鏡録』巻27「八法界如来、在於法界道場、能說法界法門。法者、実相心。界者、依此心、所出諸刹。譬如大海所生諸物、皆無不海。一切諸法、皆従実相心所生、皆無不心。是故当知、眼中所見色、耳中所聞聲、皆真法也。以一切法唯一法故。如經云、一切法、唯一相故。」（大正蔵48・569a）

24 延寿『宗鏡録』巻27「九法性如来、在於法性道場、說法性法門。不分凡聖善悪之法、名為性。是不分法、法界同中、重重無尽。一中解無量、法性無尽故。所以得知皆無尽者、法界中、入一一縁覓時、尽未来際無所得故。」（大正蔵48・569a）

25 鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』巻上、菩薩品第四「若以如生得受記者、如無有生、若以如滅得受記者如無滅。一切衆生皆如也。一切法亦如也。」（大正蔵14・542a）

26 延寿『宗鏡録』巻27「十涅槃如来、在於寂滅道場、能説寂滅法門。一切法、皆是涅槃。能得此意人者、於動作處見寂滅法。不離生死常得涅槃、不捨無常之身恒得常身。經云、「衆生如。一切法如。如無有生。如無有滅」。以此義故、拳足下足、不離道場。於念念中、常作仏事。故知、通達一念法、法周円。諦了一心門、門具足。則無辺仏事、不出一塵矣。」（大正蔵48・569b）

華嚴宗の澄観（738-839）であることが確実なのは5か所である。残りの2つの中、1つは本稿のテーマであり、もう一つは延寿が他の著作で澄観であることを明示している。

<表2>

No	宗鏡録（大正蔵 48）	典拠	備考
1	澄観和尚答云、迷真妄念生悟真妄則止能迷非所迷安得（439a）	『演義鈔』大正蔵 36・456a	
2	如観和尚拂此義云、無法非真何有・（474c）	『演義鈔』大正蔵 36・396c	
3	是以観和尚、於一心門、立十浄土（567a）	未詳	★本稿のテーマ
4	観和尚云、凡聖交徹、即凡心而見（605a）	未詳	延寿『万善同帰集』では清涼国師（澄観）の言葉として引用 ²⁷
5	観和尚云、此上無縁之知、斯為禪（626a）	『演義鈔』大正蔵 36・280a	
6	如観和尚云、難一切法如幻者、妄法（905c）	『演義鈔』大正蔵 36・589c	
7	澄観和尚華嚴疏云、上来諸門、乃至無尽（952a）	『華嚴経疏』大正蔵 35・0517c	

これらから、十浄土の教説も No4 の教説のように、澄観の現存しない著作の可能性が考えられる。ただ、次の点が新羅華嚴との関連が考えられる。

4 新羅華嚴との関係

筆者は十種如来の教説が、次の点から新羅華嚴と関連すると考えている。

① 『一乘法界図』 引用文との一致

第一には新羅華嚴の代表的人物である義相の主著『一乘法界図』の引用文との関連である。前に挙げた十種如来の中、第七真如如来の経証として、

有為無為、一切諸法。有仏無仏、性相常住。無有変異。

が引用されていた。この中、下線を引いた「有仏無仏、性相常住」の文章は『涅槃経』に説かれ、次のように涅槃の体、あるいは十二因縁が常住であることを説くものである。

・涅槃の体について述べるもの

27 延寿『万善同帰集』「清涼国師云。凡聖交徹。即凡心而見仏心。理事雙修。依本智而求仏智。」（大正蔵 48・973b）

爾時世尊告光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。涅槃之體、非本無今有。若涅槃體本無今有者。則非無漏常住之法。有仏無仏性相常住。以諸衆生煩惱覆故、不見涅槃便謂為無。曇無讖訳『大般涅槃經卷』第二十一、光明遍照高貴德王菩薩品第十之一（大正蔵 12・492a）、

・十二因縁について述べるもの

善男子。我諸弟子聞是説已不解我意。唱言如來說十二縁定是有為。我又一時告喻比丘而作是言。十二因縁、有仏無仏性相常住。同前（大正蔵 12・567a）

これをもとに東アジアの文献では、宝亮等『大般涅槃經集解』、慧遠『大乘義章』、吉蔵の『勝鬘寶窟』、『浄名玄論』、『大乘玄論』、『二諦義』、智顛『維摩經略疏』に引用される。しかし、『宗鏡録』の引用文と全く同じ文章は、新羅華嚴の祖である義相の『一乘法界図』にだけ出るのである。それは次のようである。

説与不説。等無差別。生与不生。等無差別。動与不動。等無差別。一切差別相对法門。准例如是。故経云。有為無為一切諸法。有仏無仏性相常住。無有變異。是其義也。『一乘法界図』（大正蔵 45・713c）

『一乘法界図』のこの文脈は、一乗の世界としてあらゆる相対的な法が本来的に無差別であることを説いている。そして、そのことを下線部の経証によって証拠づけている。ここから、十種如來の教説は『一乘法界図』を知っていた人物の可能性があると考えられる。

②「相即相融」という言葉

続いて指摘するのは「相即相融」という言葉である。第三の般若如來は無住道場で無住法門を説いているが、その教説は次のようであった。

経に云く、「三世間に入中、自身の所住の處、隨求の處、永く無自性なるが故に住相を得ず」と。是の故に当に知るべし。一切諸相は、一つの無住の法にして、隨縁の時、相即相融して無住の本従り一切法を立つ。能く無住の心を解するを、般若如來、恒に無住法門を説くと名く。

ここに「相即相融」という言葉が出る。これは華嚴思想の術語であり、めずらしくないと考えられるが実は新羅華嚴にしか見られない。すなわち、『一乘法界図』に2例²⁸と、義

28 ①「前義、可別。以本末相即、相即相融、顯中道。後義、以名義互為客、顯無我義。所顯道理不理。能詮方便別。」（大正 45.0713c）②「縁起者、隨性無分別。即是相即相融。顯平等義。正隨第一義體也。」（大正 45・715a）

相系文献とされる伝法蔵『華嚴經問答』の3例だけである²⁹。ちなみに「相即相融」ではなく、「相即相入」であれば多くの用例がある (sat で調査: 93 か所)。

③無住法の重視

前と同じく第三の般若如来の教説の中に無住法が取り上げられている。これは『維摩經』に基づくものであるが、この無住法は義相系華嚴で重要視される概念である。義湘『一乘法界図』の直弟子から均如にいたるまでの義湘系華嚴思想家において、無住が広く用いられ、基本的には無自性と等しく相即相入の根拠として用いられている³⁰。

④重層的解釈：五海印説

これはそもそも十種の如来を整理するという考え方を問題とする。十種如来といえば、華嚴教学の十仏を想起させる。それとは違うものとして、新羅華嚴に見られる重層的教理解釈との関連を挙げてみたい。例えば五海印である。

- ・五海印：ある帝釈天が須弥山の頂で阿修羅と戦う時に、ある像がある海印に現ずるというモチーフ

	帝釈	須弥山頂	阿修羅	現ずる海印
1	三僧祇劫歴修之帝釈	法空須弥山頂	所知障阿修羅	三科百法像、 現於大円鏡智海中之海印
2	不可計数劫歴脩之帝釈	本覺須弥山頂	根本無明、阿脩羅	恒沙性功德像、 現一心真如海中之海印
3	一念不生之帝釈	一行三昧須弥山頂	妄念阿脩羅	無相無分別相像、 現不二実相海中之海印
4	二仏世界微塵数劫歴修之帝釈	摠相須弥山頂	分別遍計阿脩羅	十普法像、 現世界海中之海印
5	十仏之帝釈	法性須弥山頂	無住実相阿脩羅	三世世間像、 現国土海中之海印

『積華嚴教分記円通鈔』巻1 (観仏全4・246bc)

十種浄土の教説はこれと似ている。十の如来、十の道場、十の教説という、枠組みの作り方が新羅華嚴と似ていると考えられる。

29 ①「問。三乗事理。普法事理云何別。答。三乘中事者、心縁色礙等。理者平等真如。雖理事不同、而相即相融、不相妨礙。亦不相妨、而事義非理義也。」(大正45・598b)、②「問。起信論以真如熏無明。無明熏真如。其相云何。答。不他故。不相知故。謂真如平等義。無明迷自。義非真如無無明。非無明無真如。是故互熏也。此義、即顯事理明闇、相即相融義。入無分別理也。」(大正45・602b)、③「雖有無二諦相即相融。而非即其事法相、円融自在故。故語義、能詮所詮、分齊不不參也。一乘正義、中即不如是。隨舉一法、尽攝一切故。即中中自在故。可思也」(大正45・609c)

30 佐藤厚「義湘系華嚴思想における無住」(『印度学仏教学研究』94、1999年)

5 結語にかえて：「観和尚」をめぐる二つの可能性

以上、十種如来をめぐる「観和尚」の教説を見、それと新羅華嚴の関係を指摘してきた。では「観和尚」は新羅の人物であるか否か。究極からいえば、それを裏付ける新たな文献的証拠が出てこない限り 100% 確実なことはいえない。よってここではどこまでも可能性を示すことにしかならない。現在、筆者が考えている可能性を 2 つ提示する。

第一の可能性としては、「観和尚」は華嚴宗の澄観であり、十種浄土をめぐる教説は澄観の現存しない著作の中で説かれていたとするものである。すると新羅華嚴と似た部分は、澄観が直接、あるいは間接的に新羅の文献を参考にした可能性がある。

第二の可能性としては、「観和尚」は華嚴宗の澄観ではなく別人であり、新羅の華嚴を学んだ人物である。これに参考になると思われるのが、新羅文献である『法界図記叢髓録』には、「観師」という名前で『十二因縁観』という文献が引用されるが、これは澄観の著作ではなく、内容から新羅華嚴文献である³¹。『十二因縁観』を書いたと考えられる「観師」と今回の「観和尚」が同一人物であるかどうかは問題としない。

これらは現在のところ決定的な証拠はないが、新羅文献収集のために、可能性を指摘しておくことは無駄ではないであろう。

<参考文献>

・一次文献

延寿『宗鏡録』（大正蔵 48）

・二次文献

佐藤厚「『健拏標訶一乗修行者秘密義記』の基礎的考察」『東洋学研究』39、2002年

— 「『宗鏡録』卷二十八所引「雑華嚴經一乗修行者秘密義記」について」（『東洋学研究』41、2004年）

— 「『健拏標訶一乗修行者秘密義記』における義湘『一乘法界図』の依用」（『印度学仏教学研究』104、2004年）

— 「澄観撰『十二因縁観』の著者問題」（南都仏教 通号 86、2005年）

— 「義湘系華嚴文献に見える論理」（『韓国仏教学 SEMINAR』7、1998年）

柳幹康「愚中周及『稟明抄』と『宗鏡録』」（『花園大学国際禅学研究所論叢』13号、2018年）

31 佐藤厚「澄観撰『十二因縁観』の著者問題」（『南都仏教』通号 86、2005年）